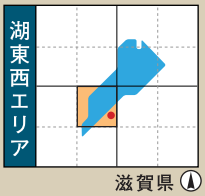
史跡
特別史跡

安土城跡（あづちじょうあと）

安土町下豊浦・能登川町南須田ほか　大正15年10月20日指定



安土城は、石垣の本格的な採用、瓦葺きによる城郭建築の採用、居住空間と権威の場としての本丸、天主の建築、城下町の形成、武士団の集住など、いろいろな意味で画期となる城郭で、近世城郭の基本的な姿はここから生み出されました。比高差100m程の山頂に建つ高さ50mの巨大な天主を想像してください。

当時のできごと	
1573年	武田信玄没
1576年	信長、一向宗の顕如を石山本願寺へ攻める
1584年	小牧長久手の戦い

織田信長と安土城

信長は、天正元年（1573）将軍足利義昭を追放し、事実上の天下人となります。同年、姉川の合戦以来信長を苦しめた浅井、朝倉氏を滅ぼし、天正3年(1575)に宿敵武田氏を長篠の戦いで破り、翌天正4年「天下布武（てんかふぶ）」の拠点として安土城の築城に着手します。

安土城の築かれた安土山は、佐々木六角氏の居城である観音寺城（学習シートNo.030）が所在する繖山から内湖に向かって半島状に延びる、比高差が約100m程の山です。城の中心となる天主、本丸は山の頂上に築かれ、その南に摠見寺（そうけんじ）が建立され、山の中腹、山裾には家臣団の屋敷を始めとした様々な施設が配置されました。また、城の南には城下町を形成し、楽市楽座やキリスト教の教会が置かれ、首都の偉容を整え始めていました。天主は天正6年の末には完成し、翌7年5月、信長はここに移ります。信長が本能寺で非業の最期を遂げるのは、それから3年後の天正10年（1582）のことです。そしてこの天主も、続く光秀と秀吉との山崎の戦いの混乱の中で焼失しますが、その後信長の後継者として秀吉に擁立された三法師（信長の孫）が一時入ります。しかし、天正12年（1584）に三法師が坂本城にうつされると廃城となり、その後は、信長の菩提を弔う摠見寺のみが城内に残ることになります。



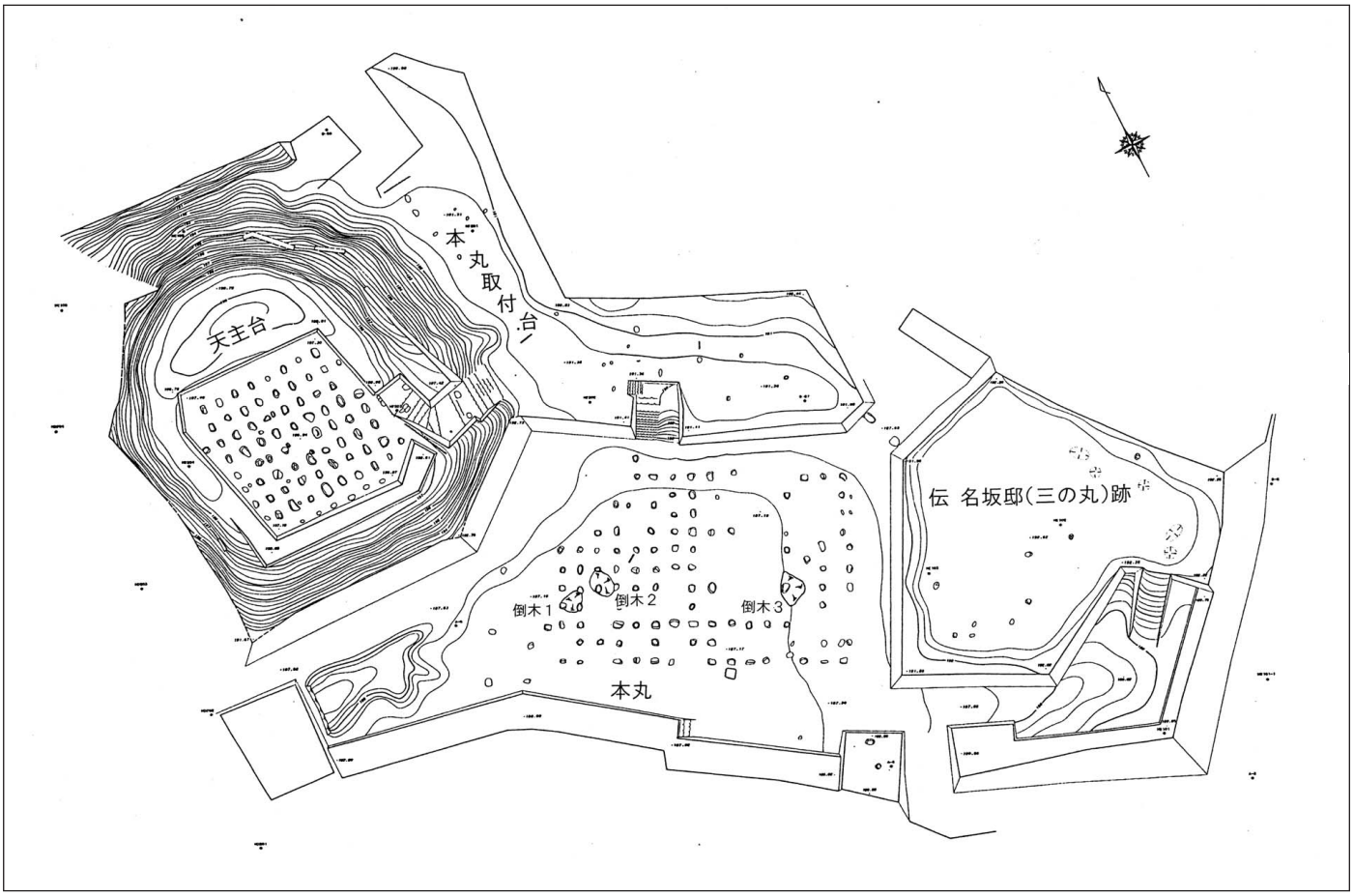
三の丸　シャチ



瀬戸　花器



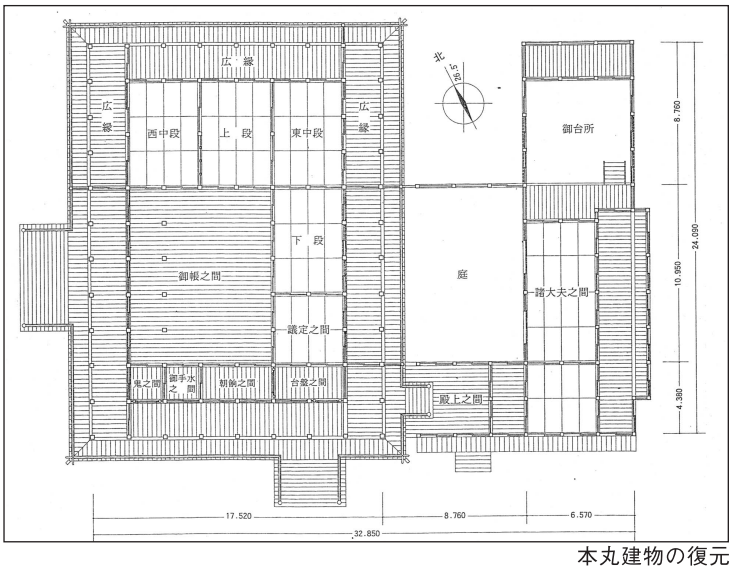
安土城主要部平面図



安土城主要部平面図

安土城の時代性

中世の城郭の多くは、山の斜面を削った堀切や土塁で構成され、有事の際に立て籠もることを主な目的として造られています。これに対して、近世の城郭は、石垣により構成される複雑な縄張りの中に、瓦葺きの恒久的な建物が造られ、政治の中心として、常に人が居住する空間となってきます。このような近世城郭の形式を最初に整えた城郭が安土城です。また、中世においては、兵士と農民は一体のもので、農繁期に戦いを行うことができませんでした。しかし、信長は兵農を分離し、専業の戦闘集団を構成し、これを城下に集住させる政策を採り、これが近世の城下町に受け継がれていきます。



本丸建物の復元



金箔瓦



安土城から出土した金箔瓦

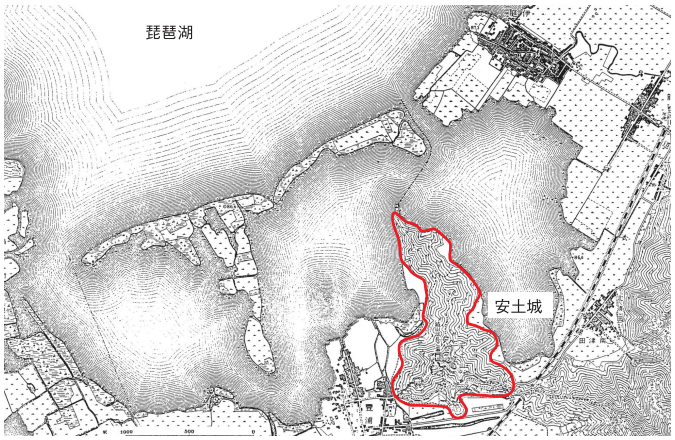
安土城の構造

大手道とその周辺

安土城の西を南北に、中山道から派生する下街道が通ります。ここから西に折れ、内湖を利用した堀を経ると大手門に至ります。近年の調査で大手口を遮る石塁に、それぞれ機能の異なる3カ所の門があったことがわかってきました。大手門を過ぎると路面幅約5m、両側に石敷きの側溝を設けた、大手道の石段が180mも直線で延びます。これは、守りを重視する城郭の構造としては極めて異例のものです。大手道の両側には、それぞれ構造が異なり、独立した小城郭ともいえる家臣の屋敷が配置されています。

主郭部

主郭部は、山の頂上付近に展開する信長の居住及び儀礼の空間です。主郭部は開放的な大手道とは全く様相を異にし、複雑な虎口構造の3カ所の門により閉じられた、堅固に守られた空間です。天主は古くからいろいろな復元が試みられていますが、外観が５層、内部が7層の総高50mを超える大建築で、赤褐色や青黒色の瓦で屋根を葺き、軒先は金箔瓦で飾られた壮麗な建物でした。これに対して本丸は、発掘調査の結果、屋根を檜皮か柿で葺いた格式の高い建物で、当時の清涼殿（せいりょうでん：天皇の住まい）に酷似した建物であることがわかってきました。信長が、天皇を迎え入れるために整備したという考えもあります。主郭部分は、石垣や礎石に強い熱を受けた痕跡が明瞭に見られ、安土城が焼け落ちたときのすさまじさを感じさせます。



明治時代の安土城跡

安土城の立地

かつて安土城を擁し、日本の首都として機能した安土町は、現在では人口1万2000人ほどの小さな町です。信長は、なぜこの地に安土城を築城したのでしょうか。この疑問を解くためには、安土の地理的な特性を考える必要があります。

戦国時代の武将にとって、京都に入り天下に覇を唱えることは究極の目標でした。実際にその夢を果たそうと行動したのは、駿河の今川義元、甲斐の武田信玄、越後の上杉謙信、尾張の織田信長であり、みな東国の武将です。彼らが京都を目指すには、中山道か東海道を通るしかありません。このうち、東海道が本格的に整備されたのは近世に入ってからであり、大量の物資と兵員を移動させるには、中山道を利用するしかなかったのです。中山道の確保（＝近江の確保）のため、信長は大変な苦労をして浅井氏、六角氏を排除します（学習シートNo.030・034）。また、安土城が琵琶湖に突き出た半島上に築かれたことも、重要な意味があります。安土城から陸路で京都へ行くには2日かかりますが、船を利用し、坂本から陸路をとれば、1日で京都に行くことができます。また、水運を利用すれば大量の物資と人員を容易に移動させることが可能です。信長は琵琶湖の水運を重要視し、湖岸に長浜城、大溝城、坂本城などの城を相次いで築かせます。このように、安土が東国と中京と京都を結ぶ地にあり、また、北陸、若狭へ通じる道も押さえることのできる要衝の地であったため、信長はここに天下布武の拠点を置いたと考えられます。

しかし、もし信長が存命し、天下を統一したとしたらどうでしょう？　更なる飛躍のため本拠を安土から、例えば、大阪に移した可能性は、否定できません。

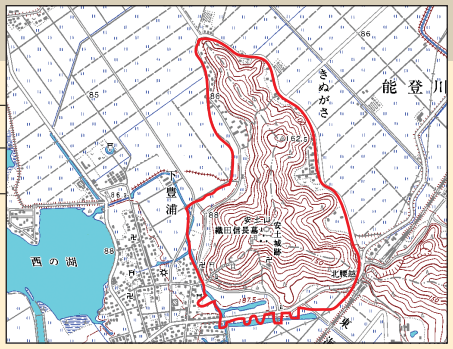
関連する文化財

安土城下町遺跡（安土町）	信長により形成された楽市楽座で著名な本格的城下町
観音寺城跡（安土町・五個荘町）	学習シートNo.030
八幡山城跡（近江八幡市）	豊臣秀次の居城。豊臣政権の近江支配の拠点となる

もっと深く知りたい

安土城考古博物館	☎0748-46-2424　蒲生郡安土町下豊浦6678
滋賀県安土城郭調査研究所	☎0748-46-6144　蒲生郡安土町下豊浦6678
安土城天主信長の館	☎0748-46-6512　蒲生郡安土町桑実寺800

安土城跡へのアクセス　JR琵琶湖線　安土駅下車



【参考文献】〔図説日本の史跡〕同朋舎　〔日本城郭体系〕新人物往来社　〔特別史跡安土城跡発掘調査報告書〕滋賀県教育委員会

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課　平成16年3月